

4. おわりに

本発表では、北海道内の 4 地点で実施された調査データをもとに分析を行った。札幌市、釧路市、富良野市における言語変容の実態に迫ることができたのではないかと考える。今後は、特に函館市で実施された調査データのうち、アクセント、音韻項目の分析を中心に、機会を改めて本研究会で報告したい。

【参考文献】

- 朝日祥之・尾崎喜光 (2015)「北海道における言語動態—札幌・釧路・富良野における実時間調査等を手掛かりに—」(国立国語研究所研究発表会「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」2015 年 1 月 24 日)
- 朝日祥之・尾崎喜光 (2013)「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その 3」第 209 回北海道方言研究会記念大会 札幌北区民センター
- 朝日祥之・尾崎喜光 (2013)「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その 2—音韻・アクセント項目からみる—」第 205 回北海道方言研究会記念大会 札幌北区民センター
- 尾崎喜光・朝日祥之 (2012)「北海道における方言使用の現状と実時間変化—札幌市・釧路市における多人数調査の結果から—」第 200 回北海道方言研究会記念大会 北海道大学学術交流会館
- 岡田大編 (2012)『北海道あるある』(宝島社)
- さとうまさ&もえ (2014)『北海道民のオキテ』(KADOKAWA)
- 千石涼太郎 (2013)『やっぱり北海道だべさ!! リターンズ』(双葉社)
- 都市生活研究プロジェクト [北海道チーム] (2011)『北海道ルール』(中経出版)
- 北海道の法則研究委員会編 (2014)『北海道の法則』(泰文堂)

札幌市方言名詞アクセントの実時間パネル調査 最終報告

～経年変化と言語イデオロギーの関連性についての一考察～^[1]

北星学園大学 高野照司

1. はじめに

筆者は、2010 年秋より札幌市山鼻地区をフィールドに、札幌市方言の名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査^[2]を行ってきたが、四回目の報告にあたる本発表では、^[3] 特に経年的変化の動態と話者要因としての「言語イデオロギー」の関連性について考察を加えたい。(「言語イデオロギー」の意味については、第 3 節で詳しく述べる。)なお、当該実時間調査における、少なくとも名詞アクセントの変異と変化の分析に関しては、本発表をもって最終報告としたい。

2. これまでの調査成果の概要

2-1. 名詞アクセントの揺れ

表 1 では、これまでの調査から明らかになった共通語的アクセント型 (2 列目) に対応する北海道方言的アクセントの揺れの概略を示す (右ボックス内)。

表 1 共通語的アクセント vs. 北海道方言的アクセント

2 拍 (40 項目)	I 型 (O●V)	鳥が(高い)・池を(なめる)、など 12 項目	2 拍 III 類が I 類 (o●V) で
	II 型 (O●V)	鳥が(飛ぶ)・池を(泳ぐ)、など 12 項目	
	III 型 (O●V)	花が(咲いた)・星を(見る)、など 12 項目	
	IV-V 型-二拍目広母音型 (●O●V)	空が(高い)・池が(深かん)でいる)・木が(太い)、など 12 項目	
3 拍 (44 項目)	IV-V 型-二拍目狭母音型 (●O●V)	葉が(ある)・池が(浅い)、など 12 項目	2 拍 IV-V 類の 2 拍目広母音が III 類 (o●V) で
	A 型 O●●V	鳥が(低い)・骨が(かゆい)、など 21 項目	
	B 型 O●●V	毛雞が(黒い)・力が(強い)、など 7 項目	
	C 型 O●O●V	小鳥が(飛れる)・つづみ(破り)、など 3 項目	
4 拍 (25 項目)	D 型 ●O●V	葉が(高い)・骨が(強い)、など 15 項目	A 型 → C 型 (、B 型) B 型 → C 型、A 型 C 型 → A 型、B 型 D 型 → C 型 (、B 型)
	O●●●V	そばが(うまい)、など	
	●O●●V	膝が(する)、など	
	O●O●V	葉を(食べる)、など	
	O●●O●V	大鳥が(黒い)、など	
	O●●●V	鳥が(いる)、など	平板 → 頭高や中高 頭高 → 平板 中高 → 平板や別パターンの中高

¹ 本発表は、科学研究費基礎研究 B (No.25284082)『変異理論の新展開と日本語変異データの多角的分析』(2013～2015 年度、代表者・松田謙次郎)からの研究助成を受けている。

² 先行調査に参加した被験者を再調査し、前回調査以降の経年的変化を各被験者ごとに見極める調査手法。本調査においては、1990 年 12 月に行われた小野 (1991, 1993) が先行調査となり、20 年の時を経て、同一被験者の再調査を行ったことになる。

³ 当該調査のこれまでの成果は、高野 (2011) において第一次報告、高野 (2014a) において第二次報告、高野 (2014b) において第三次報告として発表済みである。また、分析対象変数の追加や統計的解析を盛り込んだ、これらの報告の改訂版を高野 (2014c)、高野 (2015) として公表した。

表1について、3拍名詞のボックス内()項目は、少数派ながら観察されるパターンを示す。また、1拍名詞については、調査を完了した全話者において揺れの度合いが極めて小さく、共通語化の完了に近い状況と思われるためここでは割愛する(高野 2014c: 20)。

これまでの調査から明らかになった規則性は、以下(1)~(4)のようにまとめられる(高野 2015)。

- (1) 一般的に、3拍 > 2拍 > 4拍 > 1拍名詞の順に北海道方言的パターンが根強く生き残り、共通語化が遅れている。1拍と4拍名詞で共通語化が進んでいる。ただし、この拍数によって異なる影響力は、若い世代へ向け徐々に弱まっていく。
- (2) 一般的に、共通語化における性差は見られない。
- (3) 20年という歳月を経ても、個人語の顕著な変化(即ち、生涯変化)はほとんどの話者において認められない。先行調査と本調査との間で数%程度のアクセント型の食い違いが見られたとしても、従来の共通語型アクセントへ向けた生涯変化だけでなく、共通語で近年芽生えてきたとされる新型アクセントパターンへの移行や北海道方言的アクセントパターンへの回帰などが見られる。(この点については、2.2節、2.3節で再び触れる。)特に後者(新型の採用と方言回帰)は、「テレビ世代」と呼ばれる50代話者(先行調査時30代)において顕著である。
- (4) 比較的顕著な生涯変化を示す話者が数名おり、社会生活やことばに対する意識に他被験者とは異なる側面が見られる(高野 2011, 高野 2014c: 26~27)。(この点が本発表のメイン。第3節で詳述する。)

2-2. 揺れを支配する要因(独立変数)と影響力のヒエラルキー

表2では、調査I(1990年)・調査II(2010-12)の各々において、分析対象名詞(146項目)のアクセント(従属変数)が共通語的に発話されたか(表内2列目)、北海道方言的に発話されたか(表内3列目)を判別した結果を全発話数(3640)に対する割合としてまとめた。

また、調査I・調査II間で、発話されたアクセント型が異なる場合を「生涯変化」(個人語の経年変化)と捉え、調査Iでは北海道方言的だったが調査IIでは従来の共通語型で発話された場合(表内4列目「共通語への生涯変化」)と非共通語的に発話された場合(表内5列目「非共通語的生涯変化」)の2種類に分類した。この「非共通語的生涯変化」には、北海道方言的アクセントに逆戻りした場合と共通語で近年見られる新型アクセントパターンを用いた場合の両方が含まれている。⁴⁾

表2 全経年データにおける従属変数のタイプ別分散(1拍~4拍名詞)

	共通語的 アクセント	方言的 アクセント	共通語への 生涯変化	非共通語的 生涯変化	合計 3688 発話 28名(男12/女16)からの解析ト ークン数 ^(*)
調査I(1990年)	2503 (69.8%)	1081 (30.2%)			3584
調査II (2010-12年)	2529 (70.8%)	1045 (29.2%)			3574
調査I(1990年) ※有核名詞のみ	1670 (66.2%)	851 (33.8%)			2521
調査II (2010-12年) ※有核名詞のみ	1682 (66.7%)	839 (33.3%)			2521
調査I→調査II			190 (5.2%)	151 (4.1%)	340

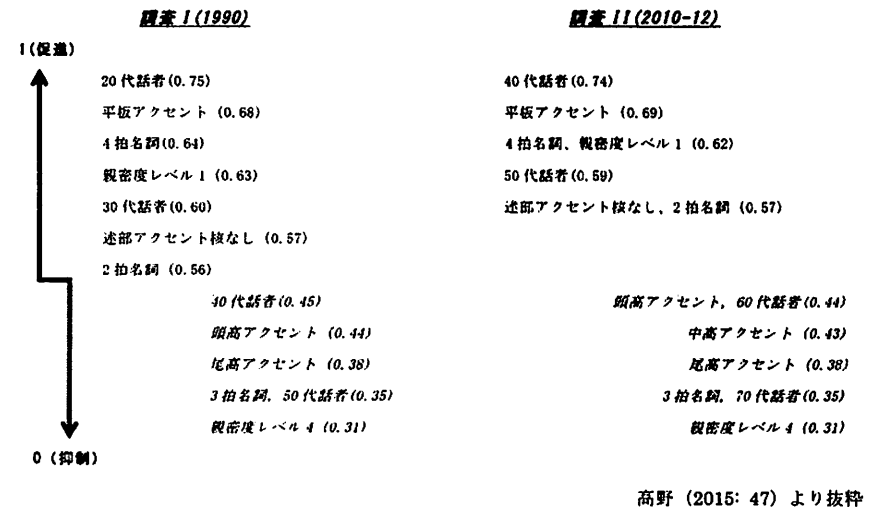
高野 (2015:44) より抜粋

⁴⁾ 新型アクセントの特定には、『新明解日本語アクセント辞典 第二版』(秋永編, 2014年)を用いた。

表2で示した全データを基に、高野(2015)では、言語運用データ用に改良された回帰分析⁵⁾の一種であるGoldVarb(Rand & Sankoff 1990)を用いて、アクセントの揺れに影響を与えると思われる要因(独立変数)の「相対的力関係」を以下図1のようなヒエラルキーとして提案した。図内の各要因に付された()内の指数は、従属変数(分析対象名詞のアクセントが共通語的か否か)産出上の蓋然性の程度を示すもので、0.5は中立値、0.5から1.0に近づくほど共通語的アクセントの産出の確率が高くなり、0.5から0に近づくほど共通語的アクセントの産出の確率が低くなると捉える。

なお、任意に選出された札幌市生え抜き話者によるアクセント産出データに基づいたこの拘束要因マップは、当該二調査で分析された特定の名詞語彙146項目のみに当てはまるというわけではなく、拍数・アクセント型・語彙特性・述部アクセント形状などの諸側面において同等の特性を持つ名詞を主語に持つ他の文(発話)にも適用しうるものと考えられる。さらに、当該マップは、本調査の被験者と同じ言語共同体(札幌市)に属すると想定される他の札幌市生え抜き住民に対しても一般化が可能と言える。

図1 札幌市方言名詞アクセントの共通語化を拘束する要因マップ
調査I(1990) vs. 調査II(2010-12)



これらの拘束要因マップから、以下の点を指摘しておきたい。

- 調査Iと調査IIの間で、要因間の相対的ランク、および各要因が持つ影響力の指数は、一部の要因(「中高アクセント」)を除き、ほぼ完璧に近い合致が見られる。これは約20年の歳月が経っても、個々人の言語運用上の揺れを支配する制約要因間の力関係や重み付けがほぼ普遍的に保たれていることを示唆する。
- 高野(2014b, 2015)での新たな発見として、名詞の拍数・アクセント型・話者年齢の他に、「語彙に

⁵⁾ 従属変数(ここでは、共通語的アクセントの産出)の確率を複数の独立変数(要因)から予測するモデルを作成すること。

対する親密度」という語彙特性⁶が、共通語化を支配する要因として重要な意味を持つことが分かった(表3)。全般的に、ある語彙(名詞)に対する親密度が高いほどその語彙アクセントは共通語化しやすく、親密度が低いほど方言型アクセントを留める傾向にあると言える(cf., 佐藤他 2014)。

表3 最高親密度(レベル1)と最低親密度(レベル4)に対応する分析対象名詞

最高親密度(レベル1)名詞	最低親密度(レベル4)名詞
(1拍) 船・水・血・虫・手、(2拍) 耳・夏・海・水・冬・花・雨、 風・秋・川・夢・音・石・雪・色、(3拍) テレビ・いちご・ビール、 電話・カ・心・電車・音楽・ラジオ、(4拍) 牛乳・卵・餅・果物、 たんぼぼ・チャンネル・コスモス	(1拍) 旗、(2拍) 箸・帯・釜・旗・窓・蜘蛛・卵・船、(3拍) 杖・きざし・刀・小麦・餅・つつじ・鳥・紅葉・毛・毛抜き・瓢・ 小豆、(4拍) 二次会・湯・小刀

高野(2015:48)より抜粋

- 図1の拘束要因マップと語彙親密度(表3)から、札幌市方言の名詞アクセントがこれまで進ってきた共通語化の系譜がある程度は読み取れる。例えば、
 - 若い世代の話者を中心に、日常生活の中で最も馴染み度が高く、(共通語体系では)平板式アクセントを持つ4拍名詞(表3、例:牛乳・チャンネル)から共通語化が始まり、同じく平板の2拍名詞(表3、例:水・風)が追従した。また、述部がアクセント核を持たない文脈の方が、主部の名詞は共通語的アクセントに成り易かった。
 - 一方、調査I当時の中年層(40代・50代[現在60代・70代])以上の話者は、共通語化にあまり染まらず、日常生活の中で最も馴染みの薄い、(共通語体系では)尾高アクセントの3拍名詞(表3、例:刀・毛抜き・小豆)を筆頭に方言的アクセントが保持され、(共通語型では)中高、低親密度の3拍名詞(小麦・つつじ・心など)がそれに続く。続いて尾高、低親密度の2拍名詞(表3、例:旗)で方言的アクセントが保持されてきた。
- 共通語化を巡る今後の展開に関して、特に調査IIのみで抑制要因として登場した「(共通語では)中高アクセント」(0.43)を持つ名詞が注目に値する(図1、右側参照)。中でも特に「馴染み度が最も低い」レベルに属する名詞(表3、例:小麦・つつじ・二次会・小刀)は、非共通語的アクセントが発現する最有力候補となりうる予測がたつ。

⁶「単語親密度」コーパス(天野・近藤 2003)に基づいて、各分析対象名詞の親密度を決定した。当該コーパスは、『新明解国語辞典第四版』(金田一他、1989)の全見出し語を基に、7段階尺度(1:低—7:高)による親密度の評定実験により構築されたものである

表4 中高アクセント名詞(共通語型)に見られる山鼻でのバリエーション

分析対象名詞	共通語での中高アクセント	山鼻でのバリエーション
小豆が(取れる)	○●○▽	○●●▽
つつじが(咲く)	○●○▽	○●●▽
心が(美しい)	○●○▽	○●●▽
足音が(する)	○●○▽、○●●▽	○●●●▽
クレヨンで(かく)	○●○▽	○●●●▽
黒糖を(食べる)	○●○▽	○●●●▽
毛を(剃る)	○●○▽、○●●▽	○●●●▽
うぐいすが(通く)	○●○▽	○●●●▽
ずんが(通く)	○●○▽	○●●●▽
花を(切る)	○●○▽	○●●●▽
小刀で(切る)	○●○▽、○●●▽	○●●●▽
歯ブラシで(磨く)	○●○▽	○●●●▽
二次会に(行く)	○●○▽	○●●●▽
大雨が(降る)	○●○▽	○●●●▽
雪が(降る)	○●○▽、○●●▽	○●●●▽

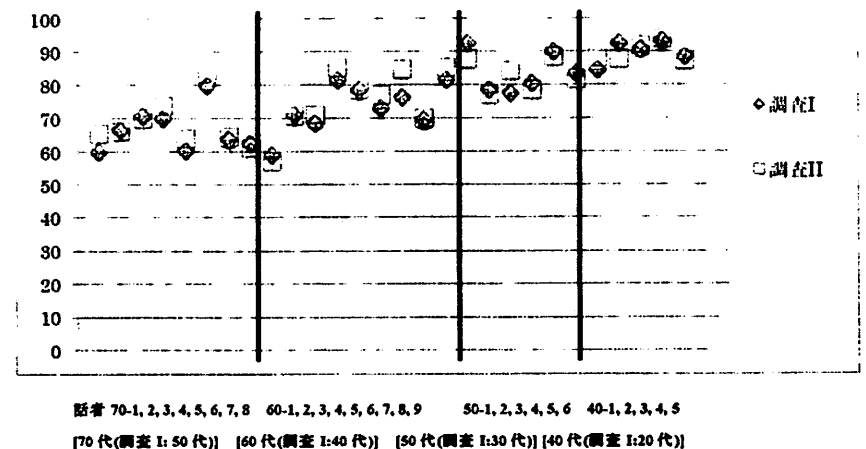
※「新型」とは『新明解日本国語辞典』(2014年出版)による

表4から、それらの4語では、従来の共通語的アクセント型とは異なる、比較的近年に普及してきた新型アクセントが年齢層を問わず全話者で広く共有されており、上記の予測の妥当性が確認できる。今後の札幌市方言で広く普及していく新しいアクセント変化であろうと思われる。

2-3. 経年的変化の動態

図2では、前回調査(調査I、1990年実施)と今回調査(調査II、2010-12年実施)の両方に参加した被験者(28名)について、各人の共通語得点の割合を基に年齢層集団ごとの個人分布を示す。

図2 共通語化得点(1~4拍名詞)割合(%)における年齢層集団別話者分布
調査I(1990) vs. 調査II(2010-12)



高野(2015:42)より抜粋

図2から以下の点を指摘したい。

- 一般に言語変化はS字カーブを描いて進むと言われるが(松田 2004)、図2の示す変化曲線は変化の

終焉期（プラト一期）に相当すると思われる。また、年齢層集団内の個人差の度合いも若い世代へ向け徐々に沈静化していることから、（少なくとも札幌市方言の名詞アクセントについては）共通語化の完成も間近と言えそうである（高野 2015）。

大規模な生涯変化（つまり、調査Ⅰと調査Ⅱでの差）は大方の話者では見られない。比較的規模が大きめの生涯変化は数名の話者（70-1, 60-7, 50-1, 50-3）で見られる。国研が四半世紀ごとに過去4度行ってきた山形県鶴岡市での実時間調査では、特に語彙アクセントの共通語化について「共通語へ向けた個人語の経年的変化が主流」とされているが（横山 2010、横山・真田 2010）、本調査結果からはその一般化が支持されないため、言語変化の進捗ステージとの絡みでさらなる検証と考察が必要だと思われる。

3. 話者特性としての「言語イデオロギー」の役割

図2で示されているような共通語化における個人差の生成を説明できる要因は他にないものか。今回のパネル調査では、調査票による文章の読み上げ音声の録音以外に、20年間での生活上の変化、山鼻地区の変化、方言・標準語意識、趣味や習い事、町内会活動などを含めた日常生活の様子など、均一の話題を挙げ話してもらい、各話者の「日常語」にできるだけ近い「語り音声」の収集も併せて行った。これらの語りはすべて文字に起こし、質的な観点から各話者の「話者要因」（言語外的要因、社会的要因）の把握を試みた結果、以下のような4カテゴリー（A～D）に落ち着いた。

【話者要因】

A. コミュニケーション形態

- 1) 日常生活におけるコミュニケーションネットワークの規模（広・狭・中間）
- 2) 町内会への参与形態（深く参与・適度に参与・参与なし）
- 3) 日常頻りに接する人（山鼻に住む親族・山鼻に住む友人や知人・山鼻以外の人・そのような人はいない）

B. 土着意識

- 1) 山鼻は変わったか（昔のまま・大きく変わった）
- 2) 山鼻の変化に対する想い（肯定的・否定的・中立的）

C. 言語イデオロギー

- 1) 「標準語」とはどこのことばか（東京のことば・札幌のことば）
- 2) 自分は方言話者だと思うか（はい・いいえ・標準語話者である）
- 3) 自分のことばや他人のことばは気になるか（はい・いいえ）
- 4) 人前で自分のことばを矯正するか、した経験はあるか（はい・いいえ）

D. 方言接触

- 1) 札幌市（北海道）方言以外の地域方言との接触（家庭内であり・家庭外であり・標準語とあり・なし）
- 2) 言語形成期の世代間コミュニケーション（三世代同居・核家族）
- 3) 前回調査以降の世代間コミュニケーション（三世代同居・核家族・なし（独身））

2.2節で言及した他の独立変数（図1）に加え、これら4カテゴリー（計12要因）も独立変数（つまり、共通語化に影響を与える要因）として追加し、GoldVarbによる段階的回帰分析（stepwise regression analysis）を行った結果、特に「カテゴリーC：言語イデオロギー」が統計学的に有意な要因

として選定された。^[7]

表5 共通語化を左右する要因としての言語イデオロギー

独立変数：言語イデオロギー	変項ごとの共通語化割合（％）	蓋然性指数
C1:「標準語はどこのことばか」	東京のことば：72.9%(1120/1536) 札幌のことば：70.2%(1348/1920)	東京のことば：0.45 札幌のことば：0.54
C2:「自分は方言話者だと思うか」 ※ 有核アクセントのみを分析対象とした場合のみ有意	はい：73.5%(1505/2048) いいえ：69.3%(887/1280) 標準語話者である：59.4%(76/128)	はい：0.37 いいえ：0.69 標準語話者である：0.63
C3:「自分のことばや他人のことばは気になるか」	はい：75.5%(1546/2048) いいえ：65.5%(922/1408)	はい：0.53 いいえ：0.46
C4:「人前で自分のことばを矯正する、した経験がある」	はい：76.5%(1469/1920) いいえ：65.0%(999/1536)	はい：0.58 いいえ：0.41

表5から、図1の要因群と比べ、弱めの影響力ではあるものの、山鼻の各話者が抱く「ことばへの社会的価値観」（標準種・非標準種）や（自分や他人の）「ことばの違いに対する規範意識」などといった社会心理が、共通語化という変化の波に乗りやすい話者とそうではない話者を分かつ作用を持つと言える。

『自分は方言を話しているという意識が希薄で、且つ、ことばやことばの違いへの神経が比較的細やかな人が共通語化しやすい。』

しかし一方、

『自分のことばが標準語ではないことを自覚しつつも、ことばの違いなどはさほど気にせず、自分の母方言に前向きな姿勢の人は共通語化しにくい』

と一般化できそうである。

さらには、「共通語への生涯変化」を従属変数として、言語イデオロギーを勘案した場合、C4「人前で自分のことばを矯正する、した経験がある」話者がその変化の担い手（「はい」0.57、「いいえ」0.42）であることも判明した。即ち、各話者が抱く言語に対するイデオロギーが、共通語化という言語変化の方向性を見極める上で重要な役割を果たしていると言える。

4. 最後に

方言学（および、欧米的社会言語学全般）において、特定言語変種に向けられる価値観や規範意識といった個々の話者の社会心理面と言語運用上の変異や変化を“直接的に”結び付けて論じる研究は、極めて少ないように思われる（cf., Kroch & Small 1978, Sankoff & Laberge 1978, 井上1985, Milroy 2004）。今後は調査票への回答のみに依存する従来の調査手法ではなく、言語変異・変化の「舵取り役」として、個別話者が母方言や主流言語（方言）に抱く感情や主義・主張などを含めた社会心理面への洞察が研究をより奥深いものにするのではないだろうか。

一方、本発表では、札幌市方言話者集団という言語共同体の中に見られる個人差を扱いながらも、アクセント産出上の語彙間、個人間の差異などから派生する解析上の誤差（ランダム効果）を適切に処理できる統計モデルを活用するまでには至らなかった。こうしたランダム効果を適切に処理し、一般化に向け、より信憑性の高い結果を得るために、近年、「混合効果モデル」（Mixed-effects Model）による統

⁷ コミュニケーション形態（カテゴリーA）と土着意識（カテゴリーB）に属する計5変数をそれぞれ点数化し合算したものを「土着文化志向性指標」（Cheshire 1982）などのような連続変数として捉え直すことを検討中である。

計的解析（例えば、Rbrul）が有効とされている（Johnson 2009, Drager & Hay 2012）。近い将来、そうした観点を取り入れた成果の公表を目指したい。

最後に、これまで実施してきた実時間パネル調査では、約四半世紀にわたる個人語の変遷をデータとして蓄積してきたわけだが、今回の名詞アクセントの経年分析の終了を契機に、分節音や超分節音の側面を含めた音声全般における経年的変化、間投詞やあいづちなどを含めた談話方略面での経年的変化など、今後はさらに様々な可能性を開拓しながら、新たな研究テーマの発掘を続けていきたい。

主要参考文献

- 秋永・枝編（2014）『新明解日本語アクセント辞典 第三版』三省堂
- 天野成昭・近藤公久（編著）（2003）『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性 第1巻 単語複密度』三省堂
- 井上史雄（1985）『新しい日本語 - <新方言>の分布と変化』明治書院
- 小野米一（1991）「札幌市方言多人数調査票について」『東日本の音声～調査票編～』日本語学における語法的特徴：東日本における音声の収集と研究（研究代表者 加藤正信）41～59 頁
- （1993）「札幌市方言多人数調査資料について」『東日本の音声 論文篇(3) 主要都市多人数調査（札幌市・名古屋市）報告』研究成果報告書（研究代表者 加藤正信）51～86 頁
- 佐藤亮一・米田正人・阿部貴人・佐藤和之・水野義道（2014）「慣言の馴染み度とアクセント型の個人差 ～鶴岡市調査から～」第98回日本方言研究会 研究発表論文集 41～48 頁
- 高野照司（2011）「札幌方言名詞アクセントの実時間研究 ～山形地区パネル調査 第一次報告」北海道方言研究会会報 第88号 40～58 頁
- （2014a）「札幌方言名詞アクセントの実時間パネル調査 第二次報告 ～変異理論的考察を中心に～」北海道方言研究会会報 第91号 9～26 頁
- （2014b）「札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査 第三次報告 ～バリエーションを支配する「言語内的要因」に関する一考察～」『生活語の世界』北海道方言研究会40周年記念文集 37-50 頁
- （2014c）「札幌方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査 ～老年話話者の「生涯変化」に着目して～」北星論集 第52巻 第1号 13～29 頁
- （2015）「札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査 ～変化を支配する拘束要因マップの提案～」北星論集 第52巻 第2号 29～51 頁
- 松田謙次郎（2004）「ことばのバリエーション研究」『ことばの科学ハンドブック』研究社
- 横山詔一（2010）「音声共通語化の予測と検証」日本音声学会 特別講演2
- 横山詔一・真田治子（2010）「言語の生涯習得モデルによる共通語化予測」『日本語の研究』第6巻 2号 31～44 頁

Cheshire, Jenny. (1982). *Variation in an English Dialect*. Cambridge: Cambridge University Press.

Drager, K., & Hay, J. (2012). Exploiting random intercepts: Two case studies in sociophonetics. *Language Variation and Change* 24: 59-78.

Johnson, Daniel E. (2009). Getting off the GoldVarb Standard: Introducing Rbrul for mixed-effects variable rule analysis. *Language and Linguistics Compass* 3(1): 359-383.

Kroch, A. & Small, C. (1978). Grammatical ideology and its effect on speech. In D. Sankoff (ed.), *Linguistic Variation: Models and Methods*. New York: Academic Press. Pp. 43-55.

Labov, William. (1972). *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.

——. (1994). *Principles of Linguistic Change: Internal Factors*. Cambridge, MA: Blackwell.

Wilroy, Lesley. (2004). Language ideologies and linguistic change. In Carmen Fought (ed.), *Sociolinguistic Variation: Critical*

Reflections. Oxford: Oxford University Press. Pp. 161-177.

Rand, D., & Sankoff, D. (1990). *GoldVarb Version 2: A Variable Rule Application for the Macintosh*. Centre de recherches mathématiques, Université de Montréal.

Sankoff, D., & Laberge, S. (1978). The linguistic market and the statistical explanation of variability. In D. Sankoff (ed.), *Linguistic Variation: Models and Methods*. New York: Academic Press. Pp. 239-250.